



4学部6学科から更なる躍進

～令和2年度から東が丘・立川看護学部が2学部体制へ～

平成30年度に千葉看護学部・和歌山看護学部が開設され、4学部6学科2研究科1専攻科でスタートしてから約2年が経過しました。令和2年度には、東が丘・立川看護学部の学部改組により、「東が丘看護学部」「立川看護学部」が開設されるとともに、「和歌山看護学研究科」も新たに設置されます。5学部7学科3研究科1専攻科として、これからも多様化する医療のニーズに応え続けていきます。

【上段】左：「臨床栄養学実習」での調理風景（医療保健学部医療栄養学科）、中央：授業の合間に五反田キャンパスにて（助産学専攻科）右：高校生向けイベント「Study Campus」を実施（医療保健学部医療情報学科）【中段】左：「FIBA 3x3 U-23 ワールドカップ2019」で優勝した永田萌絵選手（女子バスケットボール部）、右：駐日トルコ共和国特命全権大使を招いての特別講演会（和歌山看護学部）【下段】左：立川市消防団規律訓練の様子（東が丘・立川看護学部）中央：「ふなばし健康まつり」にボランティア参加（千葉看護学部）右：外国人患者へのケアの仕方を研修で学ぶ（医療保健学部看護学科）

CONTENTS

2 特集

- ・台湾・秀傳医療グループとの連携
- ・女子バスケットボール部の活躍

4 各学部・学科等の紹介

13 Information

- ・科研費採択率ランキン
- ・立川市消防団への入団

14 東京医療保健大学 同窓会

15 国際交流

16 Topics

台湾・秀傳医療グループと「医療情報学」に関する 教育研究連携協定を締結

医療情報学科では、大学ビジョンに掲げている「多文化共存の開かれた大学教職員の研鑽」を重視しています。その一環として、本学科では、アクションプランKPI（Key Performance Indicator）の一つである「海外からの短期研修等の受け入れ件数」に30件という高い目標を設定し、その実現に向けて国際交流委員会をはじめ各教員が取り組んでいます。このような活動を活性化させるため、本学と台湾・秀傳医療グループとの間で、医療情報学に関する教育研究連携を締結しました。



協定締結式は、2月12日に、台湾の行政機関である「台湾駐日経済文化代表処」（五反田キャンパスから徒歩15分）で実施されました。本学からは石原副学長はじめ6名、秀傳医療グループからは劉立副院長はじめ3名が出席したほか、代表処の陳俊榮・科学技術部長にも立ち会いいただきました。同氏からは「両機関の協定を歓迎するとともに、この協定を通じて両国の医療の発展に繋がることを期待する」とお言葉を頂きました。



秀傳医療グループは8つの医療機関を擁するほか、台湾のコンピュータメーカーであるASUSと医療システムに関する合弁事業を行うなど医療ITにも非常に積極的です。AIやIoTなど今後の医療に大きな影響を与える情報通信技術（ICT）に関する研究を一緒に行ったり、本学の学生や先方の医療従事者が相互に行き来するなど、積極的な交流を進めていく予定です。

第一弾として学生4名・教員4名で3月中旬に現地の病院及び秋葉原に相当する電子部品やコンピュータの市場「光華商場」などの訪問を計画しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて見送りとなりました。しかし、ICTに関する提携パートナーですので、様々な形でオンラインでの交流は継続しています。状況の改善を待って、相互訪問できるように取り組んでいきたいと思えます。

学長室プロジェクトチーム/IR推進室補佐
医療保健学部医療情報学科 准教授 瀬戸 僚馬



左から、台湾・秀傳医療グループ日本法人 SmartHealth Japan International（株） CEO平松重光氏、台北駐日経済文化代表処 科学技術部 部長 陳俊榮氏、秀傳医療グループ 醫療資訊 副院長 劉立氏、東京医療保健大学 副学長・医療情報学科長 石原照夫、医療情報学科 瀬戸僚馬、研究協力部長 諸田清

女子バスケットボール部が大学日本一 3連覇の栄誉!

本学女子バスケットボール部は第71回全日本大学バスケットボール選手権大会（以下、インカレ）にて、12月9日からの連日の試合に勝利。3年連続3回目の優勝を果たし、女子バスケットボール大学日本一の栄誉を勝ち取りました。

本学女子バスケットボール部は平成17年4月の東京医療保健大学開学から1年後の平成18年に5人（経験者3人、初心者2人）の部員で関東大学4部リーグとして産声を上げました。創部から8年後の平成26年には関東大学1部リーグに昇格。その後もチーム mottoである「今できることのベストを尽くす」の信念を持ち続け、強豪校との対戦に向けた厳しい練習を日々積み重ねチームを成長させてきました。平成28年（創部10年目）の第68回インカレで準優勝。平成29年は第67回関東大学女子バスケットボールリーグ戦での初優勝に続き、第69回インカレで初優勝しました。翌年の第70回記念大会のインカレで2連覇を達成しました。

今年度は主力選手の国際大会参加（ユニバーシアード競技大会、FIBA 3×3 U23ワールドカップ）などでメンバー全員が揃っての練習が十分できない中、秋の関東大学女子バスケットボールリーグ戦では全勝優勝を果たしました。「今できることのベストを尽くす」チーム mottoをばねに、12月9日から始まった第71回インカレ

（北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州の9ブロックからの代表強豪32大学によるトーナメント方式）において連日強豪校との厳しい戦いを勝ち抜き、12月14日の白鷲大学との決勝戦に勝利をおさめ、大学日本一3連覇の栄誉を勝ち取りました。

個人賞として、最優秀選手賞に永田萌絵さん（医療栄養学科4年次生）、優秀選手賞には平末明日香さん（医療情報学科4年次生）、藤本愛妃さん（医療情報学科4年次生）が受賞しました。平末さんはMIP賞、アシスト王賞も受賞しました。

現在の部員は27人（4年次生5人、3年次生7人、2年次生6人、1年次生9人）、創部以来チームを牽引している恩塚亨監督はバスケット女子日本代表のスタッフを務め、現在、女子日本代表アシスタントコーチです。なお、卒業生9人がWJBL（バスケットボール女子日本リーグ）チームに所属しています。（プレーヤー8人、マネージャー1人）

女子バスケットボール部の頑張りを讃え、大学日本一3連覇の栄誉を祝っていただき、更に、次年度を見据え、引き続き皆さまのサポート、応援をお願い申し上げます。



第5回 健康・生きがいメッセ2019で健康測定を行いました！

2019年12月8日(日)にスクエア荏原にて開催された、第5回「健康・生きがいメッセ2019：人生第2ステージのアクティブシニアは元気でいるだけでも社会貢献！」に、医療保健学部の有志学生7名と教員4名が参加しました。

本学は「健康測定・健康づくり」のブースを出展し、来場者の方々に握力や歩行速度などのフレイルチェックや足圧分布などの測定を実施しました。また、医療保健学部医療情報学科の今泉一哉教授とsilvereye株式会社が共同で開発している、VR映像を使ったりハビリテーション支援サービス「RehaVR」の体験コーナーも設置いたしました。

健康への興味をお持ちの来場者が多く、待機列が出来るなど盛り上がりを見せ、40名以上の方にお立ち寄りいただくことができました。今後も地域の健康づくりへ積極的に貢献して参りたいと思います。



小さな国際交流 —オーストラリアのプレイスクール訪問—

2019年7月、医療保健学部看護学科の秋山美紀准教授と社団法人健康フラ・介護フラ協会（理事長：栗原志功）が、オーストラリア・ゴールドコーストのラブラドル・プレイスクールを訪問しました。

世界地図を身にまとい、日本、オーストラリア、フラの故郷ハワイの位置を示すと、園児たちは「こんなに遠い国から来てくれたんだ!」とびっくりしていました。その後、オーストラリアの曲「ウォルツィング・マチルダ」や日本の曲「上を向いて歩こう」をフラの振り付けで踊り、あっという間に楽しい時間が過ぎました。最後に園児たちはハグの嵐で見送ってくれました。

プレイスクールからもFacebook上で本学への感謝の言葉を頂きました。秋山准教授は「本当にささやかな、小さな交流でしたが、すごく喜んでいただけてよかったです。これを機会に園児たちが日本やハワイに興味をもってくれて、国際交流を行ってくれたらうれしいです」と語っています。次年度も引き続き、ハワイの素晴らしい文化や日本で愛されている曲や文化を世界に届けていきたいと思っています。



Facebook上での本学へのメッセージ



みんなで楽しくフラダンス



コアラに扮して世界地図で学習

100人給食

医療栄養学科では、管理栄養士の国家資格を得るために様々な専門科目を開講しています。中でも国家試験科目の1つでもある「給食経営管理論・実習」では、特定給食施設（学校・病院・福祉施設・事業所など）で、特定多数の人々に継続的に給食を提供する意義や目的、方法、評価などについて幅広く学びます。座学では理論を学び、実習ではその応用編として大学に設置されている模擬厨房で実際に給食を作り、最終的には100人分の給食を調理・提供・販売しており、私達は「100人給食」と呼んでいます。

厨房内には、実際の特定給食施設に設置されている物と同様の大型調理機器（回転釜、スチームコンベクションオープン、洗浄機など）が配備されており、学生が考えた献立をもとに100人分調理すると同時に、大量調理における衛生管理や特定給食施設で作成しなければならない多種類の帳票類の作成、給食における食材料費や経費などの経営管理を含む管理栄養士の業務内容について、多角的総合的に修得します。

学生は、調理実習などの少量調理とは違う100人分の大量の食材や大型調理機器を目の当たりにし、食材のみならず調理方法も若干違うため、初めは戸惑うようです。しかし、9～12人の班員で協力して準備を進め、食券を購入して下さった教職員や同級生、上・下

級生が食べに来てくださり、アンケートに「おいしかった」「レシピを知りたい」「嫌いなものや食べられなかったものが食べられた」などの感想を聞くことで、達成感と今後のモチベーションにつながるようです。給食は、安くて美味しく安全な食事であることはもちろん、食育や疾病の治療、QOLの向上などにつながるものです。学生が大学の授業を通して、給食の意義や目的のみならず、喫食者や調理従事者の立場に立ち、その気持ちを思い遣ることができ、総合的な学びにつなげることができていると嬉しいです。

講師 さかいりえ 酒井 理恵



盛り付け・提供風景

「臨地実習」

管理栄養士養成施設では、病院、保健所、特定給食施設等において適切な実習を実施しなければなりません。この実習は学外における必修授業であり、その目的は、「実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識および技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識および技能を修得する」となっています。大雑把には、「学内で得た知識、技術等を栄養管理の実践場面に適用し、理論と実戦を結び付けて理解する」と言え、これがこの授業の本体です。

本学における臨地実習の概要は表1の通りですが、実習に臨むには履修条件があり、表2に示す科目を修得しないと臨地実習を受講できない、あるいは単位認定されない仕組みになっています。つまり、履修要件科目が再履修となったり、単位認定要件科目を修得できないと、臨地実習は年遅れとなり、さらには、スムーズに卒業できないといったことも起きます。明らかに勉強不足で成績が芳しくない学生はハードルが高いと感じるようですが、順調に臨地実習に臨めるよう、我々教員は1年生の段階から厳しくかつ親身になって教育・指導に当たっています。

この授業は実際の「職場」が教室となるため、文頭で述べた目的云々だけでなく、社会常識や社会人としてのマナーも学べますし、学内での授業よりもさらに時間厳守、規則などに則った言動、危機管理能力、臨機応変な対応、積極的かつ協調的態度等が要求されますので、これらの面からも魅力ある総合的な授業と言えるでしょう。加えて、将来の進路決定（就職や大学院進学など）に少なからず影響を与える役割も持ちます。そんなことから、1

人が計180時間の実習時間ではとても足りないと、個人的には思うところ。また、実習施設が、臨地実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲすべてを合せると50余施設にもなっており（同じ施設で特定期間に多人数を受け入れできない）、施設の職場事情・環境等の違いから、そのレベルも含めて実習内容を統一できない、いわゆる平等な実習内容にならないのが事実で、学習意欲のある学生はとくに、これらにやや不満を感じるようです。ただ、実習時間増は、施設の受け入れ能力や必修授業が詰まった学科の時間割上その実施が困難であり、実習内容の統一も、各施設の諸事情や本学以外の多くの学校が同じく実習していることを考慮すると、極めて難しいです。今後も継続して前向きな対策を検討しつつ、現状では今の臨地実習環境で最大の授業効果が得られるよう、教員も学生も、そして各実習施設も、試行錯誤しながら努力を重ねたいと思っています。

※臨地実習の事前・事後学習をするために「総合演習Ⅰ（必修科目）」を設けている。

※臨地実習は、実習生を受け入れてくださる各施設のご厚意、ご協力でも成り立っている。

教授 もりもと しゅうぞう 森本 修三

表1：臨地実習の概要

	臨地実習Ⅰ	臨地実習Ⅱ	臨地実習Ⅲ
受講学年	3年次後期（おもに8～9月）		4年次前期（おもに4～9月）
単位数	選択必修（Ⅰ、Ⅱどちらかを履修）：1単位		必修：3単位
実習期間	1週間（45時間）		3週間（135時間）
実習施設	病院、老健、特養	保健所、保健センター	病院
実習内容	給食経営管理論	公衆栄養学	臨床栄養学 給食経営管理論 給食の運営

表2：臨地実習の履修要件・単位認定要件科目

2年次前期履修科目	給食経営管理論Ⅰ、応用栄養学実習Ⅰ
2年次後期履修科目	臨床栄養学Ⅰ、給食経営管理論Ⅱ、給食経営管理論実習 応用栄養学実習Ⅱ、栄養教育論実習Ⅰ
3年次前期履修科目	臨床栄養学Ⅱ、臨床栄養学実習Ⅰ 公衆栄養学Ⅰ、公衆栄養学実習、栄養教育論実習Ⅱ

※総合演習Ⅰは臨地実習と並行して開講し、原則欠席不可としている。

2019年度 医療情報ゼミ 発表会

医療情報学科では2019年12月25日、3年次生による医療情報ゼミの発表会を実施しました。AIを搭載したロボットや統計学的調査、アプリケーション制作など多種多様な成果が発表され、活発な議論が行われました。今回は各ゼミの発表タイトルと、比江島先生ゼミの内容についてご紹介いたします。

発表題目一覧

● 深澤ゼミ

- ・ロボットによる病院受付業務の効率化に関する研究

● 比江島ゼミ

- ・みんなのお金

● 瀬戸ゼミ

- ・ユニフォームがもたらす心理的な影響
- ・医療における色に対する印象

● 津村ゼミ

- ・ICD10分類からみた基礎医学教材の開発
- ・将来人口推計の手法について
- ・Palmiによる基礎医学クイズの開発
- ・PalmiによるITパスポートクイズの開発

● 柴野ゼミ

- ・乳酸菌の体内における様々な役割
- ・オタクについて
- ・インターネット依存に関する一考察

● 駒崎ゼミ

- ・会話の認知症予防効果と会話支援システムの効果
- ・認知症患者を対象とした人型プロダクトの仕様検討
- ・人型プロダクトの外見デザインによる受け入れ度合いの変化
- ・人型プロダクトの適切なサイズと素材の検討、設計
- ・プロダクトの動作を実演

● 今泉ゼミ

- ・溺れるとは？水難事故から身を守る小学生向け教育方法の検討
- ・医療サービス提供者としてロボットは選好されるのかー医療情報学生を対象とした調査ー
- ・個人のための感想記録アプリケーションの検討
- ・オリンピック・パラリンピックに訪れる外国人の為の熱中症対策動画
- ・迷路を使った英語学習ゲーム
- ・爪に着目した掻痒感評価の検討
- ・こどもの健康管理の学習を支援するアプリケーションの開発

(発表順)

比江島欣愼ゼミ

比江島ゼミでは、ゼミを履修するまでに受講した「データサイエンス」、「臨床データ分析Ⅰ」、「臨床データ分析Ⅱ」の学習内容を土台にして、調査の計画、実施、調査データの管理、分析、分析結果の考察、公表の一連の活動を行い、その経験を通して現場に立脚したデータ管理者、データサイエンティストの育成を目指しています。

今年度は、消費税率の引き上げや軽減税率の適用などの社会情勢から、大学生の消費行動や金銭感覚にゼミ生の関心が向き、「みんなのお金」というタイトルでアンケートを用いた横断研究を実施し、その結果を報告しました。

調査では、対象の基本属性の他、お金にまつわる考えや行動、どのくらいお金に関心があるかを測定する「Love of Money scale」、消費税率に関連する項目などが調べられ、医療保健学部3学科合わせて443名のアンケートが回収されました。分析はその対象を自宅から通う女学生259名に限定して実施され、お金に関する学生の各種行動が所属学科や兄弟の有無などの影響を受けていることが結果として報告されました。一部の行動に星座や血液型が関連しているという報告については、会場でその解釈について熱い議論が交わされました。

今回の経験が、ゼミ生のデータサイエンスへの理解を深め、彼らの今後の活動に良い影響を与えることを期待します。

教授 ひえじま よしみつ
比江島 欣愼



発表時の様子

看護研究の第一歩となる卒業研究

3年次の11月からスタートした卒業研究の成果報告会が11月6日に行われました。臨床看護学コースの2019年度の卒業研究のテーマを表に示します。報告会を終え安堵感と達成感に満ち溢れた学生たちの姿、学生たちの4年間の想像以上に成長した姿に教員ならではの醍醐味を実感しています。

卒業研究は、各領域に所属する8～10名のグループごとに、具体的なテーマを設定し、研究計画を立案し、研究倫理審査委員会へ申請し、立案した研究方法に沿った研究を実践するという看護研究の「入り口から出口まで」を体験する一連のプロセスで進められます。カリキュラムに示された所定の時間数(単位数)を優に超える時間をかけて、卒業研究に取り組んでいる学生の姿があちこちのゼミで見受けられます。学会における口頭発表を模して行われる報告会では、25週間にわたる臨地実習での経験もしっかり生かされた質疑応答が行われ、4年間の学びが凝集されており、卒業研究の意義を改めて実感しています。

卒業研究のグループ(領域)分けは原則として学生の希望に沿って行われます。卒業研究ばかりでなく統合実習、さらには就職活動や国家試験対策なども、ゼミごとに行われますので、卒業後も学生同士の絆となっております。

各ゼミでは、卒業研究の内容をさらにブラッシュアップして、関連する学術集会での発表を目指した取組みを行っており、学生の研究に対するモチベーションの維持にもつながり学生の絆をさらに強めています。写真は2018年度の卒業生(成人・老年看護学領域)が、卒業研究の成果を2019年12月に金沢で開催された日本看護科学学会にて口頭発表した際のものです。学生の皆さんの表情には達成感

が、指導教員の先生方の表情には安堵感が見てとれます。

卒業研究は、学生たちが、卒業後も臨床現場での看護研究を自律して積極的に進めていくための基本的なスキルを習得することを目的としています。卒業研究が学生の皆さんの、これから長く続く看護研究への第一歩となることを願っています。

臨床看護学コース 看護基礎学領域 教授 ^{さかい かずお} 酒井 一夫



日本看護科学学会学術集会で発表した卒業生

グループ名	テーマ
看護基礎学Ⅰ	放射線に関する不安～「漠然とした不安」軽減のために～
看護基礎学Ⅱ	喫煙と出生の関連について～都道府県別の喫煙率と出生指標に注目して～
基礎看護学	ビニール袋を用いたオリジナル手浴の有用性の検討
母性看護学Ⅰ	大学生の避妊に関する意識と知識
母性看護学Ⅱ	LGBT認識とLGBTイメージにおける看護系大学生および社会人の相違
小児看護学	乳児は機器を通して母親の声を認識できるのか
成人・老年看護学Ⅰ	ストレッチャー移送時に女性看護師が行う胸骨圧迫の姿勢による質の比較
成人・老年看護学Ⅱ	早期体験実習が看護学生の就業意欲に与える影響
精神看護学	看護系大学生の体型不安と食行動および自己受容との関連
地域看護学Ⅰ	地域高齢者の孤独と食事バランス・栄養素摂取量との関連
地域看護学Ⅱ	大学生・大学院生におけるインターネットサービスの利用状況が睡眠に及ぼす影響
総合看護学	看護学生、看護師に対する医療安全教育の成果と課題に関する文献研究

災害看護学に関連した卒業研究 卒業研究を発表する学生たちは輝いていました

災害看護学コースの3回目の卒業研究発表会を、11月2日(土)に開催しました。災害看護学コースでは、「災害」に関連したテーマを設定することを卒業研究の要件にしています。テーマは、所属したゼミの教員と学生たちが相談して決めています。表で一目瞭然のように、それぞれのゼミの特徴を踏まえたテーマが選定されました。

卒業研究が終わると、4年次生は直ちに国家試験の準備に取りかかりますので、今年は発表会を半月早く、11月上旬に開催しました。しかし、この時期は各領域の実習の時期でもあり、ウィークデーでは3年次生や全教員が参加することができないため、今年は発表日を土曜日に設定しました。当日は、7領域9グループ(各10～11名)が、1年間の研究の成果を、200人以上が参加した学会形式の発表会で見事に発表しました。

発表は、1グループあたり10分の発表と10分の質疑応答が進められます。質疑応答は、学生中心に進められ、最後に主たる評価担当の教員がコメントするという方式で行いました。あらかじめ各グループの研究内容を抄録としてまとめ、3、4年次生にも配布したこともあり、学生からは予想を越え核心を突く鋭い質問が出されました。

3年次の12月には自分が所属し、卒業研究を行う領域が決める必要があります。そのため、3年次生には、発表会直後に各領域を訪問し卒業研究等に関する個別相談をする時間を設定することで、自分の所属する領域を選択する一助としてもらっています。

発表会では、正式な評価以外に、3、4年次生にも学生の視点からの評価をする機会が与えられており、その結果のベスト3を公表しています。4年次生は、「内容をよく知らない3年生も発表を聞いて

て評価するので、10分間で自分たちの主張をより分かりやすくまとめる必要がある」と認識しているため、分かり易い発表の工夫が随所に見られました。

昨年度の発表は9つの演題として「日本災害看護学会」「日本看護科学学会」「日本災害医学会」「日本母性衛生学会」などの学術集会で発表されています。さらに、一昨年度には「第23回日本集団災害医学会」で最優秀学生賞を受賞しました。

卒業研究を通して、研究の進め方(研究の立案から発表まで)を理解し、研究の面白さを体験できたのではないかと思います。この経験を生かし、卒業後も研究に対するモチベーションを持ち続け、看護・看護学の発展に寄与してほしいと思っています。

災害看護学コース 看護基礎学領域 准教授 ^{たかき はるよし} 高木 晴良

表1 本年度の卒業研究発表会プログラムと学生評価

グループ名	発表時間	テーマ	4年評価	3年評価
基礎Ⅰ	9:05～9:25	避難所における効果的な清拭剤の検討～温湯・重曹・竹酢清拭を比較検討して～		
基礎Ⅱ	9:25～9:45	被災者の手指衛生方法に関する検討～一般男子大学生を対象とした手指衛生物品の除菌効果から～	2	
小児	9:45～10:05	乳幼児と養育者に対する防災プログラムの検討と課題		
基礎	10:15～10:35	車中泊における下肢挙上および弾性ストッキングの着用による睡眠の質の改善と、それに伴う疲労感の軽減	1	1
在宅	10:35～10:55	首都圏下型地震において帰宅困難者のオストメイトが必要とする一時滞在施設の備えの検討	3	
母性	10:55～11:15	妊婦が地震発生時から待機姿勢をとるまでの安全な移動動作の検討		
成人	11:25～11:45	DMAT看護師におけるメンターの有無と職業キャリア成熟との関連		
老年	11:45～12:05	高齢者の自然災害に対する情報的備えと自己効力感との関連		3
精神	12:05～12:25	在宅で生活している精神障害者における防災対策と防災意識の検討～大学生との比較を通して～		2

これからの看護師育成における教育と 臨床との連携に関するシンポジウム参加

千葉看護学部が開設され2年が経ちました。学生、教職員ともに学びあう同志でありたいと試行錯誤に取り組み、尊敬と信頼による関係が築かれてきたと感じています。

新年度になりますと、初めての患者様受持ち実習を修了し、看護の面白さと難しさを味わったばかりの新3年生には、早くも国家試験対策が始まります。また、新2年生は注射や吸引といった侵襲を伴う看護技術の演習を控えています。学部全員が、ますます前向きにチャレンジしていく意気込みです。引き続きよろしくお願ひいたします。

さて、人々やその暮らしの多様化と保健医療制度の変化に伴い、臨地実習にも改革が求められています。千葉看護学部では社会の期待に応える看護専門職者を育成すべく、船橋市や千葉県、そして地域医療機能推進機構（JCHO）と連携し実習を準備・実施しています。

昨年11月には第5回JCHO地域医療総合医学会（於：パシフィコ横浜）にてシンポジウム「これからの看護師育成～臨床と教育の連携のあり方～」に企画・参加をしました。座長は河嶋知子JCHO本部経営企画部医療担当副部長と本学の宮本千葉看護学部長が担い、シンポジストとして石田智恵子船橋中央病院副看護部長、原田麗子東京高輪病院看護師長、および安藤瑞穂本学部講師と宮本が発表を行いました。

病院からは質の高い臨地実習をめざした実習指導看護師の学習活動や、定期的な実習検討会議等の教育体制整備について発表がありました。大学からは本学の理念と未来に向かって千葉看護学部で育成したい人材像、そのためにどのような臨地実習を検討しているのか、そして病院と協働して臨地ならではの学修を創り上げてきた経過や成果を報告しました。

会場にはJCHO病院から看護師を始めとする大勢の方々が参加しておられ、具体的な実習指導の研修内容や、大学としての人材育成の目標について質問があり、病院、大学ともによりよい学修環境づくりをめざして工夫をしてきた経緯を紹介しあうことができました。

学部開設からの2年間に、臨地実習を中心に協働してきたJCHOと大学ですが、お互いに知らないまま重ねている努力もあることに気づき、今後の連携を発展させる貴重な機会となりました。

学部長 教授 宮本 千津子



先進的な地域連携活動の見学による学び

超高齢社会、少子化、国際化が進行する中で、医療機関のみならず、地域で生活する人々への療養や健康増進に向けた包括的な看護観の育成が求められています。千葉看護学部では、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）本部の協力を得て、所在する地域の特性を活かした地域連携活動を実践している病院を紹介してもらい、学生がその先進的な地域連携活動を見学体験し、地域の方々の医療、健康管理、福祉への様々な取り組みについて学びを得る課外活動の機会を企画しました（授業単位に含まれません）。

その第1回病院見学として、2019年9月19日にJCHO群馬中央病院および群馬中央病院附属介護老人保健施設へ、2年次学生3名と引率教員1名が参加しました。看護部長よりご挨拶の後、地域医療連携副センター長の案内の下に、周産期母子センターやNICU、入退院センター、地域包括ケアセンターの見学を行い、さらに介護老人保健施設では新規入居者のケアプラン検討会議、地域包括ケア病棟ではレスパイト入院（介護家族支援短期入院）の患者家族と病院スタッフ、訪問看護師、業者を交えた入院前カンファレンスを見学するという貴重な体験を得ました。

参加した学生からは、医師、介護支援専門員、理学療法士などの多職種ミーティングを目の当たりにすることで「それぞれの専門性を活かして連携する意義に気づいた、地域連携についてさらに深め

て行きたい」「外来から入院、そして退院後の在宅まで切れ目のない継続した看護を提供する重要性を学んだ」「自分の専門分野だけでなく幅広い分野の理解が必要とわかった、今後の学修や実習に努めたい」などの感想が聞かれました。

今後も体験希望学生を募り、全国の特徴ある地域連携活動病院を対象に、継続的に実施していく予定です。

老年・在宅看護学領域 准教授 山本 由子



開学2年目平成世代から令和世代へー1期生に後輩2期生ができました

2019年度は元号が、平成から令和に改まり社会全体が、新しい令和の時代の始まりを実感した1年でした。和歌山看護学部においても2期生を迎え、1期生にやっと後輩ができました。これからの東京医療保健大学和歌山看護学部が「ONE TEAM」になり、大きな夢の実現に向かって確かな歩みと足跡を刻んだ年になりました。その一端を以下にご紹介したいと思います。

4月～6月：オリエンテーション、入学式、授業開始、合同合宿と慌ただしい日々の連続。2学年になりカフェテリアもお昼12時15分頃熱気に溢れ超満員！

7月～9月：7月は地域看護活動実習（2年生）、基礎看護援助実習Ⅰ（1年生）の臨地実習があり、教員FDとして「臨地実習指導の実際」について研修会が開催されました。7月14日には、第1回大学院説明会と学部説明会が同日に開催され、木村学長から午前、午後を通してご挨拶をいただきました。



8月：和歌山市恒例「紀州踊りぶんだら節」に「THCU和歌山看護学部」連として参加。

木村学長や2年生が先頭、続いて1年生、教職員と皆さん踊りの練習成果もあり良く揃っていました。今回「元気賞」受賞。

また、オープンキャンパスや2回目大学院説明会等も学生ボランティアや、教職員の協力を得て、来場者からの評価も大変良く終了。9月28日：2020年度大学院和歌山看護学研究科（修士課程）の入学選抜試験が実施されました。4月には修士課程の1期生が入学します。

10月～12月：後期が始まり学生も教職員もフル回転！11月3日～4日医愛祭テーマ「咲」を掲げ、まだ2回目というのにいろいろ趣向を凝らして、子どもから高齢者まで楽しく、2日間大賑わいでした。後夜祭も学生と教職員とで後片付けの後、最高に盛り上がりました。



12月9日～20日：2年生が初めて受け持ち患者さんをもって実習する基礎看護援助実習Ⅱがありました。学生全員インフルエンザも寄せ付けず頑張りました。



そして、クリスマスツリーの飾りつけをして年末の片づけをし冬期休暇に入りました。



年が明け2020年、学生にとっても、関係各所の皆様にとっても、教職員にとっても健やかな年でありますように！！

基礎看護学領域 教授 名越 民江

社会人として大学院で学ぶということ



私は、総合病院の急性期病棟で勤務後、生活に近い場所で看護がしたいという学生時代からの思いもあり、現在の介護事業会社へ転職しました。転職当初は介護施設の看護師として、多くの介護職員の中で少ない人数で看護をすることの難しさを痛感しつつも、住まいという場所で毎日会う関係性の中での看護の魅力

を感じる機会となりました。その後本社の間接部門へ異動し、看護師の研修企画・運営や業務の標準化、医療・看護関連のサービス企画を担当してきました。2年前からは、認知症に関する社内外への理解促進に関する企画にも少し関わらせてもらっています。看護職の中であまり出会わない職種ですし、直接ケアをしない状況での看護師としての役割を説明することが難しい時が多々ありますが、日々介護が展開される日常の中で、職員がやりがいを感じて生き生きとられる環境づくりが、利用者である高齢者やその家族の幸せにもつながると思いこの仕事を続けています。

そんな中で、大学院進学のかっけは、ある講演会で耳にした副学長坂本先生の「人は看護がないと生きていけない。でも、看護だけでは生きていけない」という言葉でした。ヘルスケア分野で働き続けたいと思いつつも、看護師としては中途半端な専門性で私はどのように貢献できるのだろうと考えていた時でした。先生の言葉は今までやってきたことも何か意味があると思わせてくれました。病院・介護施設や株式会社で得た経験と、様々な出会いから頂いてきた学びとともに、自分の興味関心を一度深掘りして強みにしてみようと思い、今に至っています。将来的に看護師・介護士の働き

甲斐とケアの質の両輪を支援する環境づくりに貢献していけるように、研究テーマを検討中です。

実際の大学院での学びは、大学時代の看護の知識・技術を学び実習で体験するというものとは違い、授業で扱うことは概念的なことが中心です。明確な答えが何かあるわけではなく、自らの答えを科学の力を借りながら構築しているという印象を受けます。授業やゼミでは、インプットだけでなく、新たに会った経験の異なる仲間や先生との対話により新たな気づきを得ます。また、働きながらの学びは楽とは言えませんが、学びや気づきをすぐに実践できる、試すことができる環境は学びを深めているように思います。このような環境を与えてくれた会社にも感謝しています。

2年間はあっという間です。もっと自学の時間を作らないと…と思いつつ過ごした1年でしたので、時間を大切にしながら能動的に学び楽しんで2年目を過ごしたいと思います。

医療保健学研究科 修士課程1年
医療保健情報学領域 よこえ みなこ 横江 美那子



看護職の働き方について打合せをする様子

暗闇をさまよい続けながらも自立して楽しく研究を進める



私は医療安全の専従セーフティマネージャーとして勤務しながら博士課程に在籍しています。看護専門学校卒業後、臨床での経験を積み、2014年3月に本大学院医療保健学研究科 医療情報学領域修士課程を卒業しました。修士論文の一部は、学術集会において発表を経て、学会雑誌に掲載されました。その後も修士課程で学んだことを糧に、様々なテーマで学会発表や雑誌投稿を継続してきました。

そんな折、学会や研修会で、安全管理者は「2年ごとで交替している」「放射線技師が担当している」「私は孤独です」等の声を聞き、組織で知識の継続性はどのように行われているのか、担当の職種は看護師が多い中、職種を越えた協働がどのようになされているのか、あるいは、長く続けている人はモチベーションをどう維持しているのか、などの問いが生まれました。

悶々としていたところ、本大学院のパンフレットが目にとまりました。「明確でない現象を的確な言葉で表現し理論化・一般化して社会貢献を目指す」という博士課程の理念は、進行方向を示す標識のように感じられました。なにより、働きながら学び研究できる指導形態は自分に合っていると感じ、再び大学院の門を叩くこととなりました。

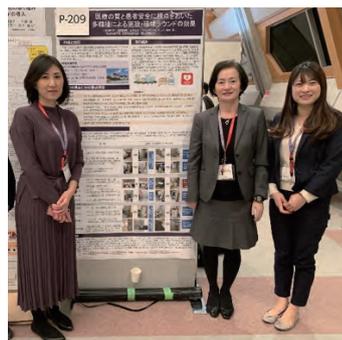
この1年は、研究テーマのリサーチクエストを絞り込むため

の文献検索を続けてきました。この論文は何との関連を述べているか、どんな介入がされているか、わかっていること、まだわかっていないことをまとめるといった日々を送っています。また、ゼミでは指導教員の先生をはじめ看護学領域の先輩・仲間と共にディスカッションし、医療安全以外の見聞を深める機会になりました。

“光あるうちに光の中を進め（レフ・トルストイ）”

今そしてこれから、暗闇をさまよい続けながらも楽しく自立して研究を進める自分という光に向かって、邁進していきます。

医療保健学研究科 博士課程1年
看護学領域 たかはし しずこ 高橋 静子



第14回医療の質・安全学会学術集会にてポスター発表（中央が本人）

第5回日本NP学会学術集会—NPとして活躍する修了生が成功に導く！—

2019年11月16日(土)、第5回日本NP学会学術集会が日本教育会館(東京)で開催されました。

今回の学術集会は本大学が担当しました。NPの養成教育が開始され10年が経ちましたので、テーマを「変革する医療のキーパーソン、診療看護師(NP)—これまでの10年、そしてFuture Challenges—」に設定しました。大会長は私が務めさせていただきましたが、NPとして臨床現場で活躍している本大学院の修了生6名が企画委員となり本学術集会の企画・運営を担ったことが大きな特徴です。本学術集会により「NPによるNPのための学術集会のスタートがきられた」と自負しております。

企画委員会を2018年4月に立ち上げ、1年半をかけ準備してきました。NP・NP学生・医療関係者のニーズやNPに対する理解の拡大などを考慮し、特別講演1題、教育講演3題、シンポジウム2題、パネルディスカッション1題、ランチョンセミナー4題を開催しました。また、前日の15日(金)午後には修了生の企画運営によるハンズオンセミナー3ブース(PICC・形成外科的縫合・心臓超音波検査)、交流集会1ブースを設定いたしました。このハンズオンセミナーは事前申し込みが殺到する状況でした。一般演題は64題、口演42題、ポスター22題でした。実践報告だけではなく、「連携・タスクシフト」「アウトカム評価」等の演題が増え、NPの役割・実践活動に関するエビデンスの蓄積の機会になっております。学術集会の抄録集は日本NP学会学会誌のSupplementとして近日中にウェブ公開されますのでご覧ください。

参加者は会員345名、非会員92名、学生103名、計540名で、看護以外の他職種の皆さんの参加が多いことも本学術集会の特徴です。

一般演題の発表、シンポジウム、講演においてはフロアとの活発な意見交換が展開され、NPに関する問題意識の高さを実感しました。外部の施設を使用しての学術集会でしたので様々な不安はありましたが多くの皆さんから企画内容、運営に関し高い評価をいただきました。

最後に、修了生だけではなく、本大学の職員の皆さん、NP学生の皆さんにもご協力をいただき心より感謝申し上げます。これからの日本NP学会を担う修了生、学生の皆さんにとって本学術集会がより良い経験であったことを願っております。さらに2021年第7回学術集会は、本大学院3期生の本田和也さん(国立病院機構長崎医療センター)が大会長を務めます。今回以上のご協力をお願いいたします。

総合看護学領域 准教授 岩本 郁子



メイン会場：一ツ橋ホールでの講演会



学会会場入り口

母子保健法の改正と「まちの助産室」—大学院生と取り組む産前・産後事業—

母性看護・助産学研究室の教員と助産学の大学院生で2か月に1回ずつ「まちの助産室」を開催し、9か月が経ちました。毎回、0歳児を育てる母親が母子で参加し、育児相談や、ベビーマッサージ等を行い、その後、母親同士で育児の情報交換をしながら1時間ほどの時間を楽しんでいます。「まちの助産室」を開催する度に参加した母親たちが社会との断絶感、孤独感に苛まれていることに助産師として心を痛めております。折しも、昨年12月、母子保健法が改正され、「産後ケア事業」が努力義務として法制化され、各市町村は産後1年未満の母子に対して産後ケア事業を提供することが義務付けられました。「まちの助産室」が産後ケア事業の一環として、育児に悩む母親の支えになることを目指して今後も大学院生とともに頑張っています。

昨年12月、国際助産学の演習の一環として大学院生と共にニュージーランドの助産師活動を視察してきました。日本人の経産婦さんの妊婦健診の受診場面を見学させて頂き、妊婦の主体的な行動や助産師の自律した活動に驚きました。妊娠したら、妊婦自身が自分でMy Midwifeを選び、カルテも自身で管理しており、助産に係る全ての指示はMy助産師が出すのです。母児に異常徴候が認められた場合には医師の受診を促し、超音波検査技師にエコーを依頼して、その画像の判断をするのは助産師でした。日本で出産経験のある妊婦さんから「日本よりもこちらの助産師の方が、質が高いです」と、短刀直入に言われ、日本の助産師の一人として思わず苦笑してしまいました。日本の助産師は、知識・技術面では決して劣っている訳ではありませんが、妊婦にとっては遠い存在で、助産師としての資質

が見えるほど関わっていないのです。出産の大部分が病産院で行われているので、妊婦は医師を見ています。医師により、妊娠経過の観察と胎児診断はされますが、妊婦としての主体性や産後の育児力も育てられないままに妊娠期を過ごしています。「産後ケア」は妊娠期から産後に至るまで切れ目なく行なわれることは改正法の中でも謳われています。

今回の母子保健法の改正を機に「産前・産後ケア」の担い手として、助産師が妊婦さんやその家族に見える形で活動していくことを目指します。本学の高度実践助産コースでは主体的に助産活動ができる助産師の育成を目指しています。育児不安・産後うつで自殺する母親が減少することを願い、「まちの助産室」活動を続けていきたいと思っています。

母性看護学・助産学領域 教授 齋藤 益子



助産師による健診を終えた日本人妊婦と共に

40歳を超えたらがん検診を



国民の約半数は、生涯に何らかのがんに罹る時代を迎えております。

がんは、遺伝子の変化（遺伝子変異）がもとになり、さまざまな生活習慣等が関係して発症する疾患（このような疾患を多因子性疾患といいます）で、心臓疾患や脳梗塞等と同様の生活習慣病の一つとされています。一人ひとりが、がん

に罹らないような生活習慣を心がけること（「がん予防」）が大切であることはいうまでもありませんが、加齢とともに遺伝子変異の機会が多くなりますので、がんは避けられない疾患の一つになるのではないかと思います。

がんの5年生存率が国立がん研究センターから公表され、全てのがんの5年生存率は66.4%、前立腺がん、乳がんの5年生存率はそれぞれ98.8%、92.2%で90%を超えております。がんの診断技術、治療法の進歩にともないがんは罹っても治る疾患となりつつあります。がんを「治る」疾患とするためには、がんの「早期発見」すなわちがん検診の機会を逃さないことが大切です。私は、12年前に大

腸がんを発症し、現在までに、5回の手術と12年間にわたる薬物療法を継続してきました。がんの発見が遅れてしまったからです。定期の健康診断で、強度の貧血を指摘されながら放置しており、精密検査を受け大腸がんと診断された時には、がんは、ステージⅢBまで進行しておりました。医療職でありながら早期発見の機会を逃してしまったことを悔やみました。薬物療法は身体的、精神的侵襲が大きいきばかりでなく、莫大な医療費も必要です。早期に発見していれば1回の手術とそれに続く1～2年程度の化学療法ですんだはず

です。国は、肺、胃、乳房、大腸、子宮頸部の「がん検診」の受診を推奨していますが、受診率は50%以下です。今やがんを恐れる時代ではないと思います。がん検診を定期的に受診し「早く発見し、治す」ことです。

最近、友人や従姉妹が心筋梗塞で急逝してしまいました。がんは、身の回りを整理し、生き方を考える時間的な余裕があることをしじみと実感しております。

放射線看護研修センター長 草間 朋子

産後ケア研究センター開設3年目を迎えて

2016年6月より品川区との官学連携事業として産後ケア事業が開始され、2018年4月、更なる事業拡大に伴い本学産後ケア研究センターが開設され3年目を迎えました。

品川区民を対象とした産後ケア事業（日帰り型・訪問型・電話相談）が幅広く周知され、昨年度の実績を上回る利用件数となっております。

日帰り型は、眺望の良いホテルの高層階で実施する産後ケアとして、助産師に育児や母体の体調などについて相談及び実施の確認のケアを受け、さらに安心して子どもを預け、ホテルでのランチをゆっくりできることから、リフレッシュもできると大変好評を得ております。キャンセル待ちの方も多く、その対応として区と協議した結果、昨年より利用回数を増やし、対応しております。利用者の方からは、再度利用をしたいという要望も多く挙がっております。

訪問型の利用内容は、乳房トラブル、授乳指導、赤ちゃんの成長についての相談・ケアが最も多く、利用件数も増加傾向にあります。

電話相談は、品川区以外の、関西地区、東京近郊等の他県からの電話相談の問い合わせもあります。内容については、授乳相談・乳房トラブルが最も多く、緊急性が有る方は医療機関等に紹介をして訪問型に繋げるケースもあります。また、訪問型や日帰り型利用者からの相談も増加しております。

今後も区との連携を図りながら継続支援を実施し、利用者のニーズに応えるべく、質の保証された良いケアを実施し、問題解決ができるように事業を運営していきたいと思っております。

実績報告

	日帰り型／稼働率	訪問型（件）	電話相談（件）
2018年度実績	259件／96.3%	304件	315件
2019年度実績	304件／100%	333件	556件

※2019年度実績は2019年4月～2020年2月まで。



令和元年度科研費採択率、私立大学で全国7位に 女性比率では全国1位にランクイン！

文部科学省研究振興局が2019年10月25日に公表した「令和元年度 科学研究費助成事業の配分について」において、本学は、新規採択率40.0%（新規採択件数22件）で全国17位、私立大学では全国7位にランクインしました。女性比率では、採択件数41件のうち女性研究者の採択件数が32件（女性比率78.0%）で全国1位となりました。

この結果は、本学において女性研究者の研究活動が活発であることを示しています。

本学は、今後も、建学の精神である「科学技術に基づく正確な医療保健の学問的教育・研究」を推進してまいります。

■研究者が所属する研究機関別 採択率

上位30機関中20位まで（令和元年度 新規採択分）

全国17位／私立大学で全国7位 ※緑マークは私立大学

順位	機関名	採択率	採択件数
1	一橋大学	60.7%	71
2	明治学院大学	55.7%	34
3	公益財団法人がん研究会	51.9%	41
4	東京外国語大学	50.0%	44
5	聖路加国際大学	49.1%	27
6	分子科学研究所	46.8%	29
7	立教大学	44.5%	69
8	神戸薬科大学	44.2%	23
9	東京藝術大学	43.3%	42
10	九州歯科大学	42.7%	32
11	国立情報学研究所	42.6%	29
12	国立医薬品食品衛生研究所	42.0%	21
13	慶應義塾大学	41.7%	439
13	国立研究開発法人 国立成育医療研究センター	41.7%	43
15	中央大学	40.8%	97
16	京都大学	40.1%	1,046
17	東京大学	40.0%	1,466
17	東京医療保健大学	40.0%	22
19	日本女子大学	39.4%	39
20	学習院大学	39.3%	35

■研究者が所属する研究機関別 女性比率

上位30機関中20位まで（令和元年度 新規採択＋継続分）

全国1位

順位	機関名	採択件数	うち女性採択件数	女性比率
1	東京医療保健大学	41	32	78.0%
2	高知県立大学	58	44	75.9%
3	聖路加国際大学	68	45	66.2%
4	文京学院大学	29	19	65.5%
5	神戸女子大学	33	20	60.6%
6	埼玉県立大学	60	36	60.0%
6	目白大学	60	36	60.0%
8	お茶の水女子大学	137	82	59.9%
9	武庫川女子大学	90	52	57.8%
10	聖隷クリストファー大学	47	27	57.4%
11	日本女子大学	102	58	56.9%
12	東京藝術大学	95	53	55.8%
13	名桜大学	22	12	54.5%
14	宮城大学	48	26	54.2%
15	福岡県立大学	38	20	52.6%
16	兵庫医療大学	45	23	51.1%
17	大東文化大学	46	23	50.0%
18	奈良女子大学	117	57	48.7%
19	愛知県立大学	90	42	46.7%
20	岡山県立大学	58	27	46.6%

参考：令和元年度 科学研究費助成事業の配分について http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/main5_a5.htm

東が丘・立川看護学部 災害看護学コースの 学生82名が「学生消防団員」として立川市消防団に入団

本学は、連携及び協力に関する基本協定を締結している立川市（市長：清水庄平）と協力し、国立病院機構立川キャンパスの学生が入団する「立川市消防団 機能別分団（学生消防団）」を立ち上げ、2019年10月26日（土）に立川市役所に任命式を行いました。本学からは、東が丘・立川看護学部 看護学科 災害看護学コースの学

生82名（2年次生40名、3年次生37名、4年次生5名）が入団し、任命式とあわせて敬礼や整列といった消防団員としての規律についての訓練が実施されました。

今後は、大規模災害に備えた訓練および主要行事への参加、自治会・学校などに対する応急救護訓練指導などを行う予定です。



立川市消防団任命式



規律訓練の様子

東京医療保健大学 同窓会紹介

東京医療保健大学同窓会は、栄えある第一期生が卒業した2009年に設立され、大学の協力のもと、現在4000名を超える会員は医療界やIT界、教育界など様々な分野で幅広く活躍しております。

同窓会事務局を世田谷キャンパス学生支援センター内に置き、全

国で活躍されている同窓生と大学との懸け橋として、同窓生の皆様の親睦・コミュニケーションの場として様々な活動に取り組むとともに、在学生に対しても、学生生活の応援、援助活動等の各種事業を行っております。



東京医療保健大学同窓会
第3代会長 浅香 樹

<会長挨拶>

平成30年度同窓会総会にて、3代目の会長に選任いただきました浅香と申します。私は、平成26年に医療保健学部医療栄養学科を卒業いたしました6期生でございます。大学の発展に資するため、精一杯活動してまいりますので、今後とも同窓会の活動にご支援ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

～ 役員体制 ～

- ・ 会 長 浅香 樹 (医療保健学部 医療栄養学科 6期)
- ・ 副会長 深山 侑里 (医療保健学部 看護学科 6期)
- 岡田 遼平 (医療保健学部 医療栄養学科 5期)
- ・ 監 事 内山 祥子 (医療保健学部 医療情報学科 6期)

- ・ 理 事 庄司 尚子 (医療保健学部 看護学科 6期)
- 伊藤 雅晴 (医療保健学部 医療栄養学科 5期)
- 伊藤 大揮 (医療保健学部 医療情報学科 5期)
- 市川 典央 (医療保健学部 医療情報学科 6期)
- 宇田川智司 (医療保健学部 医療情報学科 8期)
- 木所 由貴 (東が丘看護学部 看護学科 2期)
- 笠原 麻央 (東が丘・立川看護学部 看護学科 4期)

同窓会活動報告 (平成30年度同窓会総会～令和元年度同窓会総会まで)

〔活動報告〕

- 1 平成30年度同窓会総会・懇親会の開催
平成31年2月26日(土)五反田キャンパスにおいて、総会等を開催し、役員の変更、規約の改定を行った。
- 2 学位記授与式/卒業を祝う会/入学式出席
平成30年度に発行された各種式典に卒業生として同窓会長が出席、入学式では和歌山会場へも赴き、和歌山の在学生と交流する等、同窓会を周知した。
- 3 令和元年度医愛祭(大学祭)への参加(写真有)
学生会協力のもと、医愛祭に同窓会として初めて参加し、食品団体(うどん販売)として出店した。
全ての学部学科卒業生がスタッフに入り販売を行い、2日間でその年一番の売上を記録。同窓会からの事前告知の成果もあつてか、医愛祭当日は卒業生が多く来校し、教職員や同窓生との交流が見受けられた。
- 4 渋谷教育学園幕張高等学校同窓会と交流
系列校である同校同窓会組織「槐会」が主催する令和元年度ホームカミングデイに参加、会長他と同窓会活動について意見交換をした。
- 5 医療保健学部看護学科卒業生対象イベントに出席
同学部学科ホームカミングデイへ出席し、同窓会を知るとともに、今後の同窓会活動について卒業生と意見交換をした。
- 6 令和元年度同窓会総会・懇親会の開催(写真有)
令和2年2月22日(土)世田谷キャンパスにおいて、総会等を開催し、事業計画・予算計画について審議した。新型コロナウイルスの影響も鑑み、中止も検討されたが、時間短縮や入場時の手指のアルコール消毒等の実施等の対応をもって開催された。
懇親会の挨拶では、感染制御学の権威である木村学長より感染対策等をご講話いただき、医療人として、知見を高めるとともに、これからの活躍についてエールをいただいた。
今後も同窓会の活動にご注目下さい。



↑令和2年度 同窓会総会・懇親会の様子 (左下は余興のバンド演奏)



↑令和元年度医愛祭 うどん屋として出店した時の様子

国際交流

International Exchange

ハプニング続きでも楽しかった！第2回オーストラリア研修

国際交流委員会では、第2回オーストラリア研修を9月11日～20日の期間で実施しました。今年度は、全学部・学科から、また1年～4年全学年からの学生参加があり、参加者数も第1回より7名増えて26名でした。

プログラム自体は全般的に好評でしたが、往路は台風の影響で、帰路は機材の故障のために、搭乗予定の飛行機がともに欠航となるハプニングに遭遇。そのため出発も帰国も予定より1日ずれ、また到着と出発どちらも予定のゴールドコースト空港ではなく、1時間離れたブリスベン空港を使うという体験をしました。しかし、引率者が一致団結して事態に対応し、また受け入れ先のグリフィス大学からも柔軟な対応をしていただけたために、大変な事態にもかかわらず、なんとか乗り切ることができました。さらに、帰路の便の欠航時には、学生の留守宅への電話連絡などに関して大学事務局の支援もいただいたおかげで、学生や父兄の間にほとんど混乱はなく、全員滞りなく研修を終了し無事帰国することができました。

出発日が1日遅れたため、7日間の研修日程が1日少なくなることへの対応が必要でしたが、グリフィス大学にすぐに連絡をとり、予定していた内容をすべて盛り込んだ1日少ないプログラムを再構成していただくことができました。学生にとっては少し授業の詰まった研修になりましたが、全員元気に日程をこなしていました。

学生たちは、研修期間ずっとホームステイでした。ステイ先から公共交通機関を使って通学。短いながらも外国を訪問するだけでなく、そこに住むという貴重な体験をしました。最初は戸惑いながらも、徐々にステイ先の家族やその文化、英語でのコミュニケーションにも慣れて、家族と良い関係を構築しながらの異文化体験に満足したようです。

大学では午前中の英語の授業に加え、午後は、オーストラリアの医療制度や栄養と健康などについての講義を聞きました。また、病院見学や介護施設見学も行われ、学生は、特に、介護施設での入居者との交流をととても楽しんだようです。ソーラン節と歌を披露して、その後、それぞれに入居者の方々と自由な交流を楽しみました。高齢の入居者も学生たちの訪問を本当に楽しんでくださり、孫を見るかのように目を細め学生たちとの交流に笑顔があふれていました。

大学での研修の間に、カランビン野生動物保護園訪問もプログラムに組み込まれていました。学生たちは、あこがれのコアラを抱っ



カランビン野生動物保護園にて



こしたり、カンガルーと日向ぼっこしたり、カラフルな野鳥が飛び交う空間を散策したり、オーストラリアの自然をさまざまに満喫したようです。

今回は最初から最後までハプニングに見舞われた研修旅行となりましたが、それでも、学生たちにとっては、英語、医療、異文化、どの分野でも非常に収穫の大きい旅となったようです。

国際交流アドバイザー 早野 真佐子



笑顔あふれる介護施設での楽しい交流のひと時



学生との交流



グリフィス修了式

トピックス Topics

フードスペシャリスト認定資格試験 合格率100%を達成!

フードスペシャリストとは、「食」に関する総合的・体系的な知識・技術を身につけ、豊かで安全かつバランスのとれた「食」を消費者に提案できる力を持つ「栄養」と「食」の専門家で、食品の開発製造、流通、販売、外食などを担う食品産業をはじめ、食品関係の広範な分野での活躍が期待されています。本学では、令和元年12月15日（日）に3年次生52名がフードスペシャリスト資格認定試験を受験しました。結果は、52名全員が合格し、合格率100%を達成しました。

医療栄養学科 准教授 かんだ じゆうこ 神田 裕子

宇宙・科学ジャーナリスト松浦晋也氏 による公開講座を実施

2月8日（土）五反田キャンパスにおいて、ノンフィクション作家であり、宇宙・科学ジャーナリストとして活躍する松浦晋也氏をお招きし、公開講座を実施しました。

本講座は、医療保健学部看護学科（老年看護学領域）の企画として、品川区内の高齢者ケアに従事する看護職の顔が見える関係づくりを育む看護職グループ「ハンドインハンド」共催、品川区後援にて開催されました。

当日は、松浦氏が実際に認知症を患った高齢の母親を介した体験談を中心にお話いただき、参加者の方々からは、親の介護に関する困難に直面した際の対処方法が参考になった等の感想が寄せられました。



総務省消防庁「消防団募集ポスター」 に本学学生が起用されました!

東が丘・立川看護学部 看護学科 災害看護学コースの山内楓子さん（2年次生）が、総務省消防庁が消防団募集のPRツールとして作成・配布する消防団ポスター及びリーフレットに起用されました。本庁では、消防団員としての入団促進するため、ポスターやパンフレット、インターネット等の各種広報媒体を通じた消防団のPRを行っており、幅広い世代の方や様々な職業の方の消防団への理解促進及び参加の呼びかけに努めています。その一つである、学生向けのポスター等に山内さんが採用され、2020年には本ポスターが全国の対象機関へ約100万部配布されます。

山内さんは、本学学生が入団する立川市消防団の説明を聞いたことをきっかけに、地元に貢献したいという思いから、「川崎市麻生消防団」に入団しており、学業と両立しながら活躍の場を広げています。令和元年度には、「川崎市麻生消防団」が消防庁の表彰を受けており、総務省にて表彰式が行われました。



フリーアナウンサー中井美穂氏による 特別講義「医学・医療概論」を実施

「医学・医療概論」は、医療保健学部医療栄養学科1年次生を対象に、医学と栄養の関連を考え、医療現場における管理栄養士の活動の現況を理解することを目的として開講されている講義です。通常は、副学長・医療栄養学科長の小西敏郎教授が担当する本講義ですが、NPO法人キャンサーネットジャパン（CNJ）での活動の繋がりから今回特別に中井美穂氏にお越しいただき、ご自身の医療とのかかわりをはじめ、医療情報のリテラシーを中心にお話いただきました。



編集 後記 Editor's note

本号では、本学初となる海外企業との教育連携協定を締結したこと、女子バスケットボール部がインカレ三連覇という快挙を成し遂げたことを特集として取り上げております。女子バスケットボール部の主要メンバーとしてチームを牽引し、本年卒業した4名（永田萌絵、岡田英里、平末明日香、藤本愛妃）は、国際大会にも出場し、メディアにも多数取り上げられました。卒業後はプロとしての活動が決まっており、今後の活躍にも期待がかかります。

その他、今回より「東京医療保健大学 同窓会」ページを設け、活動報告を発信していくことといたしました。今後の同窓会の取組みにもご注目ください。

また、現在、新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）が流行しており、感染拡大阻止に向けて国を挙げての対策が本格化しております。本学でも、各種イベントの延期や中止を検討しておりますが、日頃の感染症対策としてマスク着用や手洗いを実行していき、大学としても、感染拡大防止策に努めてまいります。

本年は、オリンピックイヤーとなりますが、COVID-19がいち早く収束し、無事に開催されるよう願うばかりです。 (Y)

